

古今集の天地創造

田中喜美春

はじめに

新撰和歌序は、収録歌とその編成について「惣三百六十首、分爲四軸」。蓋取三百六十日開於四時耳」と記している。春秋、夏冬、慶賀哀傷・離別羈旅、恋雜をそれぞれ対偶配置し、四巻編成とした。一年三百六十日、四季の事実^ニに倣ったもので、歌が天地とともにあると意識していることの具現にほかならない。四季、恋を柱として二十巻編成を成した後に貫之がたどり着いた認識である。二十巻編成のころには、六曲一双の屏風を一年に仕立て、月次や四季が留められて、その前で儀式や算賀が行なわれていた。これらは、歌うことと天地との間に深い洞見をもつてなされた。万葉集が巻八、巻十で四季分類を採用した後、古今集がおよそ三百四十首で一年を編成したことの意図について、歌われている歌の事実によって明らかにし、かつがつ、歌の時代を可能とした真相の一端を説く。断らぬかぎり、古今集の本文は伊

達家旧蔵本で示し、他の引用歌は、新編国歌大観による。

一、竜田川の秋

貫之は、古今集の資料として古歌を献上した目録の序の長歌で秋の部について「唐錦 たつたの山の もみぢばを 見てのみしのぶ」と記した（雑体・一〇〇二）。仮名序での秋の部立は「もみぢを折り」であるが、万葉時代の叙述には「秋の夕べ竜田川に流るるもみぢをば、みかどの御目には錦と見たまひ」と書いている。万葉集に竜田川が出ず、その紅葉を歌っていないことは我々の常識であるが、貫之は、竜田の紅葉、就中、竜田川の紅葉で秋の精髓を示しうると考えていた。古今集は、竜田川の紅葉の歌を六首収録しているが、貫之集は、一首のみである（三・三三八、後述）。貫之には、他に、

竜田川秋にしなれば山近み流るる水ももみぢしにけり
（後撰集、秋下・四一四）

がある。そこで、竜田川の紅葉が秋の典型である理由を問うてみよう。秋歌の卷末三首は、次のごとくである。

秋のはつる心を竜田川に思ひやりてよめる

貫之

年ごとにもみぢば流す竜田川みなとや秋のとまりなるらむ
(秋下・三二一)

長月のつごもりの日、大井にてよめる

夕月夜をぐらの山に鳴く鹿の声のうちにや秋は暮るらむ
(同・三二二)

同じつごもりの日よめる 躬恒

道知らば尋ねも行かむもみぢばをぬさとたむけて秋はいにけり
(同・三二三)

三二一の詞書は、秋と竜田川との関係に深い思いを込めて記している。そのうえ、これと関連をもちそうな異文がある。三二三の詞書の「同じ」には異文がなく、異文のない前歌の詞書の「長月の」を受けるので、三二二は、三二三と同時に、あるいは、それ以前に収録されていた。ところが、三二二に、筋切本は「貫之」、元永本は「同人」と記す。さらに、「貫之」を記す頼山陽臨写唐紙卷子本もある。これら元永本系のみは、撰者の編集方針では不要の作者名を重複させている。この重複は、三二一が増補歌で、増補の際に三二二の作者名、貫

之を削り忘れた結果と判断される。これが事実であるならば、秋についての撰者の認識のみならず、季節の巻を編成した思考を究明する手がかりともなる。加うるに、「年ごと」の歌は、節月の季節観による歌で、続く二首は、節月の秋が去った後の歌と指摘されている(田中新一氏『平安朝文学に見る二元的四季観』五四～五五面)。氏の論拠は、「はつ」が、節月の「たつ」に対応する概念を表す語であるところにある。「はつ」は、それ自身が節月の季節の終了を意味する語ではないが、「春立つ」「秋立つ」などに呼応した場合、節月の終りを意味する。この指摘との関連も吟味する必要がある。

「年ごと」の歌は、竜田川に秋の特質を認め、その所以を歌っている。竜田川が毎年紅葉を流すのは、「みなと」と「とまり」があるからだと考えている。この論理は、木の葉を舟とすることによって成り立つ。

白波に秋の木の葉の浮かべるをあまの流せる舟かとぞ見る
(秋下・三〇一、藤原興風)

秋の水に浮かびては、流るる木の葉とあやまたれ、

(大井川行幸和歌序)

卯の時ばかりに船いだす。みな人々の舟いづ。これを見れば、春の海に秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。
(土佐日記、一月二十一日)

など、古今集時代の通念であった。第一例は、寛平御時
后宮歌合の歌で、これより以前、

二条の後の春宮の御息所と申しける時に、御屏風
に竜田川にもみぢ流れたるかたをかけるを題にて

よめる

素性

もみぢばの流れてとまるみなとにはくれない深き波
や立つらむ (秋下・二一九三)

と歌っていた。これも紅葉は舟である。

舟は、港に停泊して航行を止める。木の葉の舟も同じ
はずであるから、港で秋が終了すると考え、貫之は、竜
田川に思いを馳せた。「とまり」は、「泊り」「止り」を
掛けている。竜田川が毎年紅葉を流す理由を、舟、とま
り、みなとの用語の必然的關係に求め、竜田川で秋の本
質を表現できると考えている。この歌の発想は、貫之集
の九二六年と九二八年の歌との間にある内裏屏風歌の中
の

もみぢばの流るる時は竜田川みなとよりこそ秋は行
くらめ (貫之集、三・二三八)

と類似している。注4に掲げた歌も含め、このころ、こ
の発想に創意が傾注されていた。この歌では、秋は、空
で行き交わずに海に去っていくという新たな季節の推移
を創造している。しかしながら、以上に述べた条件は、

紅葉を流す川は、等しなみに秋を代表できる。竜田川の
紅葉が絵に描かれ、注目されていた事実に対し、歌は、
言葉によって、竜田川でなければならぬ理由を表現し
てみせなければならぬ。

万葉集には、竜田山を「韓衣裁田之山者」と表記した
事例があり(十二・二九四)、古今集にも「唐衣たつたの
山に」(雑下・九九五、よみ人しらず)、「唐錦 たつた
の山のもみぢばを」(雑体・一〇〇二、貫之)などが
ある。この言語意識は、竜田川を織物として歌うことに
連なっている。また、「海底興津白浪立田山」(一・八三三)
は、竜田の音に「立つ」を認めている。これも、古今集に、
「春霞たつ田の山」(春下・一〇八、藤原後蔭)、「まだき
なき名のたつ田川」(恋三・六二九、御春有助)などの例
がある。一つの音に複数の語を想起するのは、古今集人
の日常的言語行為であった。それによれば、「たつたがは」
に「立つ」を認めるはずである。しかしながら、この方
法で秋を歌うのは中世を待たなければならぬ。^(注5)古今集
人は、「たつたがは」の語に「立つ」を認めても、竜田
川と立秋との関係は、歌わなかった。秋全体の特質と竜
田川との普遍的な関係は認めえずとも、「秋のはつる心
を竜田川に思ひやりて」と記された詞書の用語は、「立つ」
を喚起させずにはおくまい。秋の終極が主題とされた表

現に、それと対極を表す音を含んだ用語があるとき、その意味を捨象してしまう理解は、彼らの言語行為には即さない。古今集、秋歌、二首目は、賀茂川の立秋を歌った貫之の歌で、「うち寄する波とともにや秋は立つらむ」(秋上・一七〇)と歌われ、その日、竜田川の川波にも秋が立っていた。つごもりの歌の前に秋のはてがある暦現象は、つごもりの前に節月の秋のはてが来る年を留めたとする田中氏の結論が合理性をもつであろう。

ところで、当該歌の前二首は、山と、そこから流れ出す紅葉の歌を配している。

北山に僧正遍照と茸狩りにまかれけるによめる

素性法師

もみぢばは袖にこき入れてもいでなむ秋はかぎり
と見む人のため (秋下・三〇九)

寛平の御時、「古き歌奉れ」と仰せられければ、「竜

田川もみぢば流る」といふ歌を書きて、その同じ

心をよめりける 興風

み山より落ちくる水の色見てぞ秋はかぎりと思ひ知
りぬる (同・三二〇)

いずれも「秋はかぎりと」を有し、秋の大詰めを表しつつ、葉の色が絶頂にある。「竜田川もみぢば流る」(秋下・二八四)と同じ心とは、そのような状態である。

散らねどもかねてぞ惜しきもみぢばは今はかぎりの
色と見つれば (秋下・二六四、よみ人しらず)

十月にもみぢのいと濃き、うつろひたる菊とを包
みて、人

秋はてて今はかぎりのもみぢとはうつろふ菊といづ
れまされり (赤染衛門集、二五二)

などと同様、かぎりの紅葉は変色のきわみを意味する。素性は、葉の色を見て秋のかぎりを悟ったし、興風は、坂上是則が「水の秋」と歌ったのと同じ認識から(秋下・三〇二)、つくづく秋のかぎりを感じ取っている。

古今集人にとって「秋」は、「飽き」でもあった。男
女間の思いのありようを色で表すことは、万葉集以来の
伝統的方法であったので、「飽き」も色に現れた。

石山にまうでける時、音羽山のもみぢを見てよめ
る 貫之

あき風の吹きにし日よりおと羽山峰の木末も色づき
にけり (秋下・二五六)

は、音を名にもつ音羽山が「風の音」(秋上・一六九)
を聞いて応じた歌である。秋のかぎりの色は、彼らには、
飽きのかぎりの心の状態にも見える。

忘れにける男の、もみぢを折りて送りて侍りければ
(よみ人しらず)

思ひいでて問ふにはあらじあきはつる色のかぎり
を思ひするなるらむ (後撰集、秋下・四三九)

は、このようなありようをよく示している。素性と興風
の歌の紅葉の色は、直前に、

刈れる田におふるひづちのほに出でぬは世をいまさ
らにあきはてぬとか (秋下・三〇八、よみ人しらず)

があり、「秋はてぬ」と「飽きはてぬ」が表現されてい
ることと呼応する。配列によって新たな意味が付与され、
それが理解できるようになっている。

葉の変色を「秋」「飽き」の具現とする視覚的認識に
対し、聴覚による秋の認識もあつた。萩や女郎花を花妻
とする鹿が哀切この上なく鳴いた (秋上・二二六、物名・
四三九)。「飽き・秋」の認識が基底にあり、飽きて疎遠
にする妻を恋い、秋が終れば鳴かなくなる。「長月つご
もりの日」の鹿は、「飽き」のかぎりの声でもある。

秋歌巻末部は、色と音声によつて、「秋」「飽き」の終
焉が構成されていそうである。これに對して、直接には
色も音声も歌わぬ三一一にはどのような意図が込められ
ているのであろう。三一〇とは竜田川を共通項に置き、
竜田川の普遍性を歌つて、紅葉の行方とともに秋の終り
が形を整えているが、三一一との関係が明白ではない。
三一一に知られる「舟」と「とまり」の関係は、通い婚

の習俗にあつて、舟は通う男、とまりは泊りを待つ女に
比定され、男女の間柄と見做されていた。^(注)それによれ
ば、竜田川の紅葉の舟は、元の妻に飽きて色を変え、そ
のきわみの後に新たな女性に通うことをも表しうる。飽
きのはての変節の人の有様である。この意味で、貫之の
歌の詞書は、「飽きのはつる心」の意をも拒まない。一
方、牡鹿の声は、妻の変節によつて泣く男性にも通ず
る。三一一、三一二の並列は、男女いずれにも変節が起
こる事実の表現となりうる。三〇八に表わされた「飽
き」が以後の歌に作用し、この並列は、「飽き」の具体
的行動ともなる。それを可能としたのは、木の葉の舟、
とまりを歌つた三一一である。最初からこの歌が収録さ
れていて如上の意味を形成していたのであれば、冒頭に
述べた作者名の重複は生じない。色と声による秋の極限
に、両性のありようを重ねた秋の終竟が構成されている。
三一一は、増補歌であつて、三一二にもともと記されて
いた作者名を削除しなかつたための現象と理解すること
は可能である(次節参照)。人々の思惟のあり方や、日本
語の性質が天地のありようと不可分の関係にあることの
あかしに竜田川に生起している秋をとらえてみせ、それ
を節月の秋として留めた。仮名序以来の竜田川の秋を重
んじた構想が人の営みを融合させて、装いを新たにしてい

いる。

二、東隣の常夏

夏歌巻軸の直前歌は、次のごとくである。

隣より常夏の花を請ひにおこせたりければ、惜し

みて、この歌をよみてつかはしける 躬恒

ちりをだにすゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわが寝る

とこ夏の花

(夏・一六七)

「妹とわが寝る床」を名に持つ花であるから、これに塵を置くわけにはいかないというのが躬恒の言い分である。「塵」と「床」と縁語をなす関係を構成して隣家の要望を断つた躬恒には、深い思慮があつた。その表現機構は、彼らの事物認識と言語観に根を張っている。この表現機構を明らかにするために、次の事例を見よう。

来めやとは思ふものからひぐらしの鳴く夕暮は立ち

待たれつつ

(恋五・七七二、よみ人しらず)

は、なぜひぐらしの鳴く夕暮れを区別して、立つて待つのかについての論及がない。ここには、当時の誰もが認める論理がはたらいていなければならぬ。「ひぐらし」の歌には、「待つ」を共用する歌がある。

秋の夜にたれを待つとかひぐらしの夕暮ごとに鳴き

まさるらん

(是貞親王家歌合、四一)

ひぐらしに君まつ山のほととぎすとはぬ時にぞ声も
惜しまぬ (大和物語、二四段)

待つ里もいかが聞くらんかたがたに心さわがしひぐ
らしの声 (源氏物語・若菜下)

右の第二例は、「飛ばぬ」を掛けているが、これを縁語とする例もある。

ひぐらしの鳴く山里の夕暮は風よりほかにとふ人も

なし

(秋上・二〇五、よみ人しらず)

「待つ」動作と「ひぐらし」が関連するのは、この名が「来らし」を含むからであろう。ひぐらしは、来そうだと高い確度を告げるために鳴くと受けとめて待つ。「来めやとは思ふ」状態を否定できるのがひぐらしである。名がその機能を發揮して初めて存在させられる。これが事物に対する人々の認識であり、それを言葉の関係として表現するのが彼らの歌である。この方法は、歌自体が歌の場を表現しており、極端に言えば、詞書が不要である。新撰和歌は、このような歌の集なのであろう。

ここで本論にもどそう。万葉集以来、女性は、床の塵を払って間遠になつた男性の来訪を待つ。

わたつみとあれにし床をいまさらに払はば袖や泡と

うきなむ

(恋四・七三三、伊勢)

夕されば人なき床をうち払ひ嘆かむためとなれるわ

が身か

(恋五・八一五、よみ人しらす)

この習俗は、源氏物語に至っても変わらぬ。このような日常性のなかで躬恒の意図が達成されていると解さなければならぬ。躬恒が「床」を歌い込んで所望を断つた隣人は、常夏を所望する必然性があるのであろう。

明日春立たむとしける日、隣の家の方より風の雪を吹きこしけるを見て、その隣へよみてつかはしける
清原深養父

冬ながら春の隣の近ければ中垣よりぞ花は散りける

(雑体・一〇二二)

これは、西隣に居住する深養父から東隣に贈った歌である。隣まで来ている春が東風にのせて雪の花を吹き送ってきている。世界を動かす原理としての五行思想を是認し、日本語の音と意味との関係に深く意を留めて生きた当時の人々の意識に従えば、常夏が生えている躬恒の家の庭は、いつでも夏で、その西隣は秋である。後世、藤原教長は、このような思考で、

とこなつの花のいろいろ散りゆくは秋の隣や近くならむ
(教長集、二九四)

と歌っている。

平安朝人が季節としての秋を待望し、思いを寄せても、それは、同時に「飽き」を招来させるといふ通念の中に

生きていた。相思の間柄でも秋になると飽きて間遠になるといふ彼らの意識によれば、床に塵が積もるのは、飽きた結果である。躬恒の歌は、隣が秋で、そこに常夏を譲れば飽きられて床に塵が積もることは必定という論理に支えられている。「ちりをだにすゑじとぞ思ふ」が意図するところは、隣家においては、これまでいづくしんできたような愛玩を期待すべくもなまいと思ふ理由の表明である。所望を断られても仕方ないと納得する論理である。譲り渡さずにいれば、季節はおのずから常夏で、夏のままである。他方、隣人してみれば、常夏を譲り受けなければいつまでも暑い夏が続き、待ちこがれる秋にはならぬので申し入れをした。同じ花を「なでしこ」とも称し、秋上二四四、恋四・六九五に「やまとなでしこ」の歌を収録しているが、この歌は、「常夏」でなければ成り立たない。物が問題ではなく、名が命の歌である。五行思想と日本語の性質の中で人が季節を動かそうとする歌で、五行思想を信じ、掛詞がその意味を実現すると信じて生きた人々が産み出した芸である。この巻に続く、秋歌下、巻末二首目は、すでに言及したごとく、飽きられて臥し所を共にできぬ鹿の歌である。ここにおいて「秋即飽き」の通念が結ばれ、常夏の歌の主旨は、抗すべくもなく現実のものとなっている。

季節の巻の巻末歌が撰集当初の本では現存本とは異つてゐることが判明してゐる。今日知られてゐる当初の形態によれば、春歌は「春はいくかもあらじと思へば」(春下・一三三、業平)とあり、秋歌は「秋はいにけり」(秋下・三一一、躬恒)となつてゐる。冬歌は「年は来ぬれど冬草のかれにし人」(冬・三三八、躬恒)である。いづれも歌中に季節の終りを意味する言葉がある。これらの事実によれば、常夏の歌が巻末歌だつたとは考えられない。「夏と秋と行きかふ空」(夏・一六八、躬恒)が巻末歌だつた公算が高い。これは認めなければならぬが、この二首の間には巻末歌としての配列の必然性が顕著に認められるわけではない。そのような現象を呈する一因は、この常夏歌にあるように思われる。

六月のつごもりの日よめる (躬恒)

夏と秋と行きかふ空の通ひ路はかたへ涼しき風や吹くらむ (夏・一六八)

は、夏歌の巻軸歌である。なんの問題もなさそうに見えるが、元永本、筋切本のみが作者名を「同人」、「躬恒」と記す。両本とも直前の一六七には躬恒の作者名があり、ここで作者名が重複している。これは、前節に述べた貫之の重複と同じ現象で、一六七を増補した時、一六八の作者名を削り忘れた痕跡と解される。

巻末部の歌句、歌われている内容に関連性が希薄なのは事実であるが、

月のおもしろかりける夜、あかつきがたによめる

深養父

夏の夜はまだよひながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ (夏・一六六)

から、「夏と秋と」の歌に続いていたと仮定してみると、まったく不連続であつたわけでもなさそうである。月が空に残つたまま明けて、その空で季節が行き交う。月は秋の重要な景物である。夏の月が趣を変えて秋たらしめる。季節の移行が空でなされる用意はできている。ここに常夏歌が介入することによって、このような意図が遮断され、新たな意味が付与される。常夏歌は夏を譲らぬ歌である。地上における人為的な季節の交替は阻まれ、巻末歌は、天における季節の交替である。人が夏を留めようとしても、天は摂理によって動く。天と人との関係を季節の交替によって同一人に歌わせてゐる。

深養父の短夜の月の歌は、「床」と無縁でもない。古今集の恋歌で、男女が会う歌は、恋三・六三四〜六三六の三首のみである。そのうちの一首は、躬恒の歌である。

長しとも思ひぞはてぬ昔よりあふ人からの秋の夜な

れば (恋三・六三六)

思いを通じた者の会う夜の短さを歌っている。宵のままでも明ける短夜は、月の風情の向こうにいつくしむ男女の短夜を想起させ、「妹とわが寝るところ」と関連をなす。これが常夏の歌を増補して生じさせた意味である。

現存本の四季巻巻末部には、すべて、躬恒のつごもりの歌がある。春下の巻軸歌は、亭子院歌合の躬恒歌で、増補歌である。その直前二首は、

やよひのつごもりの日、花つみより帰りける女ども
もを見てよめる 躬 恒

とどむべきものとはなしにはかなくも散る花ごとくに
たぐふ心か (春下・一三三二)

やよひのつごもりの日、雨の降りけるに、藤の花
を折りて人につかはしける 業平朝臣

ぬれつつぞしひて折りつる年のうちに春はいくかも
あらじと思へば (同・一三三三)

である。前節に扱ったつごもりの歌とこの二首の詞書とは、記述法が不統一である。古今集の詞書は、前歌と同一の語は繰り返して記さず、「同じ」を用いる(秋上・一七八他)。それが撰者の編集方法であり、前節に扱った「同じつごもりの日」は、それに従っている。ここも同様に記されるべきである。一三三三の「やよひのつごもりの日」に異文はなく、一三三二の「つごもりの日」が「つ

ごもりに」となっているのが元永本・筋切本・雅俗山莊本・静嘉堂本で、「つごもりがた」とあるのが建久本。他本に異同はない。「同じ」と書かぬことを合理化した異文であろう。多数本の本文は、一三三二を増補して、一三三三に手入れをしなかったものと理解できる。最初から躬恒のつごもりの歌ですべての季節を整えていたわけではなかった。

三、「はる」と鳴く鶯

催馬楽として歌われ、源氏物語の巻名にもなる

梅が枝に来るる鶯はるかけて鳴けどもいまだ雪は降りつつ
(春上・五、よみ人しらず)

は、「はるかけて」の意味について異説があるが、古今集人の思惟のあり方がよく留められている歌であると思う。この歌が用いている「かく」について、工藤博子氏が統一の見解を示し、次いで岩佐美代子氏が工藤説に全面的に賛意を表した。^(注10) 工藤氏は、「思ふ」「頼む」など心情表現を伴う場合の「かく」は心に掛ける意、単独の場合「口に出して言う」意と帰納し、この歌は、春だと口に出して言う意としている。この見解は、単独の用法が一義的に決定できることを証明せずに、単独用法の自説で既存の異説を退ける方法によってもたらされる。こ

のような問題は、「かく」の基本的動作を帰納して、何を何に「かく」のか個別に説くべきである。基本的動作は、とりあえず、次のごとく帰納しておく。

同一方向に力を加え、離れて存在している事物をつなぎ留める動作

当該歌について、冬から春にかけての意味とする牽証に用いられてきた、

あきかけていひしながらもあらなくに木の葉ふりし
くえにこそありけれ

(伊勢物語、九六段)

について、工藤氏は、「秋ということ言葉を言葉に出して言っておきながらも」の意とする。この歌は、六月の望ばかりに、女が「時もいと暑し。少し秋風吹きたちなむ時、かならずあはむ」と言っておきながら、兄に迎えとられて男の前から姿を消す時に、「楓の初もみぢ」に書き付けたものである。「かく」の基本的動作によれば、通説は、会う時期として半月後の秋をつなぎとめていいる。「あきかけて」は、地の文の傍線部をふまえていて、このように言う「飽きかけて」も生じると考えるのが平安朝人である。この「かけて」は、動作を始める意を表す補助動詞的用法。これが初紅葉に応じている。女がそれに歌を書いたのは、この葉は、秋になって飽きが色に現れ、私もそうなるかと恐れていたが、飽きもせず、

私の言葉である葉そのものが散って、江一面に敷きつめ、江の体をなさなくなった江にいる縁でしたの意を表すためである。したがって、この歌は、「あきかけて」と言ったことを表し、この「かく」は、「秋」を口に出して言った意を表さない。この語法とは別に「かけていふ」という慣用句がある。これは掛けた状態で言葉を発する意を表し、それぞれの動詞が意味を担っていて、「かく」「いふ」の語義は、混同できない。

「はるかけて鳴けども」の「かく」は、「はる」を何に掛けるのであろうか。万葉集には、左の例がある。

ほととぎすなほも鳴かなむ本つ人かけつともとな我
を音し泣くも

(二十・四四三七、元正天皇)

新日本古典文学大系『万葉集』は、「かけつ」は、ここでは鳴き声にかける、すなわち名を声に出すこと。鳴き声を聞いて、作者にゆかりの人の名に聞きなすのである」と注している。ほととぎすが鳴く声は、人の言葉とは無関係でありながら、「本つ人」の名に聞こえた。ここでは、鳥の声に本つ人の名が掛かっている。

武蔵嶺の小峰見隠し忘れ行く君が名かけて我を音し
泣くる

(十四・三三六二或本歌、相聞、相模国歌)

は、妹の名と同音の語を聞きつけて泣く。当事者が意図せぬ音を聞きつけたことについて、「かく」という動作

があつたからと判断している。

紫草しじくの根延ねのびふ横野の春野には君をかけつつ鶯鳴くも

(十・一八二五、作者未詳)

も同じである。発声された音が発声源の意図とは別様に聞こえる事態を「かく」と表現しており、これは、一つの音に別の意である音をつなぎ留め、重ね合わせている状態を掛ける行為と解してもたされた。問題の歌は、最後の用例とよく似た用法である。すなわち、鶯がおのれの声に「はる」という音を掛けていると判断しているのである。これは、佐伯梅友氏が「鳴き声に春をかけて鳴くけれども」と述べている見解に等しい(日本古典文学大系『古今和歌集』)。「かく」についての語学的見識に基づいた見解に対し、工藤氏は、『春をかけて』の意は判然としない」と述べ、岩佐氏は、佐伯氏に賛同し、かつ工藤説を支持していた。

古来、多くの議論を呼んだ「かく」は、右のごとき意味用法であつたが、これは、大きな問題ではない。この歌の生命は、「はるかけて鳴くども」の機能にある。それを論ずる前に、彼らの用語法を知っておこう。「梅」には、「かく」「かけ」を縁語として用いる。

春は梅秋はまがきの菊の花おのが香かくぞあはれなりける
(古今六帖、二・一三五〇、貫之)

梅の花しづ枝の露にかけける人の心はしるく見え
けり (斎宮女御集、一三八、村上天皇)

などの例があり、「五月待つ花橘の香を嗅げば」(夏・一三九)と同様、梅にも「嗅ぐ」が用いられていて、これに起因する用法である。

なき人の宿に通はばほととぎすかけてねにのみ泣く
と告げなむ (哀傷八五五、よみ人しらず)

は、菖蒲を掛ける日の歌で、それゆえ「ね」が共用される。その他、古今集では、「たすき」(恋一・四八七)、「衣」(恋二・五九三)、「稲」(恋五・八〇三)など、「かく」動作を伴う事物にかかわってこれを用いた。言葉と事物が連動している。梅の木では「かく」動作が起るのである。そこで表現の機能を明らかにしよう。

春、雪の降る日

かきくもり冬におくれて降る雪のはるとも見えで今
日もくらしつ (深養父集、二二)

年の内に春立つ、雪降る、梅咲きけり

降る雪の下にはほへる梅の花しのびにかけてはるは
きにけり (中務集、一六)

いとせめて思ふ心を年の内にはるくことも知らせてしがな
(蜻蛉日記、天延二年十二月十七日、立春)
これらの「はる」は、「春」、「晴る」、「晴るく」を掛けて

いる。^(注1)「春」は、同音の「晴る」をもたらずと考えてこの表現が成立している。中務の歌は、「しのび」に咲くから「日」を秘め続けていて、やがて晴れになるという論理である。^(注2)「梅が枝」の歌は、梅の木が「かく」動作を呼び起こし、鶯は、鳴き声に「はる」を掛けて鳴いた。そのように鳴けば晴れるはずであるにもかかわらず、雪が降り続けていると歌っていることになる。「あきかけて」と言ってしまった女性が不安を覚えたのと同じ言語観が支配している。この理解の正当性を検証してみよう。

梅が枝に鳴く鶯の声聞けば山にも今日は雪は降りつ

つ (躬恒集、四〇八)

右の歌は、諸種の躬恒集が第三句を「聞けば」とするが、続千載集所収歌は「聞けど」である(春上・一八)。第四句は、いずれの資料も「山には今日も」で、それによるべきであろう。「聞けば」について、平沢竜介氏は、「聞くの」と注し、逆接に解している(和歌文学大系「躬恒集」)。藤岡忠美・徳原茂実両氏は、順接である(私家集注釈叢刊「躬恒集注釈」)。「ど」を用いずに「ば」を用いた理由があるはずである。

桜散り卯の花もまた咲きぬれば心ざしには春夏もな
し (貫之集、九・八五六)

は、逆説で理が通る。しかし、この歌は、源宗于の贈歌

よそにても思ふ心は変はらねどあひ見ぬ時は恋しかりけり (同・八五五)

への返歌である。会わぬことが心変わりを招く人情の常を前提にした贈答であるので、返歌の確定条件は心変わりを導く。それに対して、異なった事態を表したのが下句である。贈歌の論理を取り込み、合意されている帰結を否定した思考が「ば」によって表現されている。理の当然と認められる事柄は明言せず、これを前提としてさらにこれを否定的に論理展開する「ば」の用法が認められる。この用法を躬恒の歌に援用するならば、「声聞けば」の後には雪が降らないことが共通認識として存在していることになる。はるかけて鳴く鶯は、空を晴らすことを認められていて、この「ば」が機能する。

朱雀院の春宮におはしましける時に、帯刀ら、五月ばかり御書所にまかりて、酒などたうべて、こ
れかれ歌よみけるに (大春日師範)

さみだれに春の宮人来る時はほととぎすをや鶯にせむ (後撰集、夏・一六六)

は、郭公の托卵の習性をふまえる。酒宴の騒ぎは、郭公が鳴き、さみだれが降るためであるから、春の宮人にふさわしく、晴ると鳴く鶯に代つてもらおうかの意である。郭公の育ての親についての共通認識がある。

白妙の雪降りやまぬ梅が枝に今日ぞ鶯はると鳴くなら
る (兼盛集、九二二)

は、天徳四年(九六〇)内裏歌合歌で、藤原実頼が「鶯花と鳴くことそらごとなり」と判をしている。歌合歌は、「今ぞ」で、平兼盛は、

雪のうちに春は来にけり鶯のこほれる涙今やとくら

む (春上・四、二条后)

と「梅が枝」の歌との間の歌としていよう。兼盛が初音から「はる」と鳴かせたのは、実頼の生動的観点からの批判を超えて、文学的真實の創造に加わっているからである。やはり同じ歌合の歌人で、十二歳の歌が知られる藤原元真には、

正月六日に鶯の早ねを聞きて、はらからに

鶯の初音ばかりぞ聞こゆるなるのいたらぬところ
どこに (元真集、二〇三)

がある。「春のいたらぬところ」は、

春の色のいたりいたらぬ里はあらじ咲ける咲かざる
花の見ゆらん (春下・九三、よみ人しらす)

をふまえるもので、雪が降っている所を意味する。そもそも本歌が語学的にも注目された歌でありながら、正解がない。「咲かざる花」をつぼみの花と解する通説は、疑問である。この語法は、咲かずに花となっていること

を意味しよう。「いたり・咲ける」「いたらぬ・咲かざる」が対応している歌であるから、元真は、まだ雪が降っている場所、初音を聞いている。下つて、

山里に冬ごもりながら侍りしに、正月一日、なほ
雪の降りければ

降る雪に空ははるとも見えねども竹のよこめて鶯ぞ

鳴く (康資王母集、四三)

鶯ははると鳴けどもなよ竹の枝にも葉にも雪は降り
つつ (林葉集、二)

などもあり、降る雪の中で、「はる」が掛詞にされ、鶯が「はる」とも鳴いている。さらに、「梅が枝」の歌を本歌にしながら、立春解氷にかかわって、鶯が鳴くとする歌もある。

梅が枝にむすぶこほりも春立てばとくと聞きつる鶯
の声 (大式高遠集、三二五)

古今集、春歌は、巻頭と二首目の立春の歌に続いて、三首目から九首目まで七首が雪の歌である。冬歌は、実質的に雪の歌のみで構成されている。風物を季節に結びつけて認識する方法により、季節は風物によって特徴づけられた。したがって、降雪は、冬の標徴であった。一方、天象による暦が季節を規定し、その規定の中に風物が位置づけられた。暦の季節の境界で生じる風物の様相も事

実としてとらえられ、遅桜、時雨の錦などを夏、冬に配した。初春の雪は、冬のなごりとして位置を与えられた。冬の気配が残る中で、天がつかさどる春がいかにして現実のものになるかがこの世に存在するものとの相関においてとらえられた。鶯が「晴る」と鳴いて雪空が晴れ「春」となる。「梅が枝」の歌では、鶯の鳴き声と天地の様相に密接な関連があるとされ、その関係性が日本語の性質によって成り立っているとされた。花に鳴く鶯が天地を動かしている。

むすび

新たな時代は、新たな天地を創造して開始される。この世の事物が日本語の性質によって相関関係を形成していると歌い、四季巻に天地が創造された。現存の四季巻は、一回的に編成されたものではなく、基本的な構造に改良が加えられて成ったものであった。詩と異なるのは言葉のみであるとする文学観の実践が日本語についての人々の認識を基盤として行なわれたことによって、「日域之俗」、「民業」としての歌に新たな時代が開かれた。

注

(一) 冬・三二四は、川、山両本文があるが、山を採用。

(2) 長月のつごもりつごもりに、女車、紅葉の散る中を過ぎたり

もみぢばのぬさとも散るか秋はつるつる電田姫こそ帰るべ
らなれ (貫之集、二・二二三)

(3) 詩題は「泛秋水」。延喜七年九月十日の大井川行幸和歌は、詩題と問題で行われた(後藤昭雄氏「延喜七年大井河御幸詩」、『平安朝漢文文献の研究』所収)。

(4) 貫之には、九二三年から九二九年までの作品に

今までに残れる岸の藤波は春のみなとのとまりな
りけり (貫之集、三・二八六)

がある。これは、解氷の水を花と歌った

谷風にとくる水のみまことにうちいづる波や春の
初花 (春上・二二、源当純)

(5) うち寄する波より秋のたつた川さても忘れぬ柳かげか
な (秋篠月清集、三二五、歌合百首)

御破していくよに秋のたつた川朝け涼しき水の音かな
(壬二集、下、秋・二二二六)

ちぎらずよ心に秋はたつた川わたるもみぢの中たえむ
とは (拾遺愚草、上三三八〇、閑居百首)

(6) 拙稿「中興和歌の原理」(『国語と国文学』一九九二年十二月) 参照。

(7) いづかたかとまりなるらん山風のはらふ山路に舟まど

ひして (是則集、一四、大井川行幸和歌)

敦慶親王家の船卸して、宇多法皇の送別に、伊勢が

水の上にかかべる舟の君ならばこそぞとまりとい
はましものを (雑下・九二〇)

と歌ったのは、この方法の援用で、この時、中宮温子
が招待されていることを意味する。

(8) 現存諸本には、詞書や作者名の重複がある。そのうち
の何箇所かは、改編時の過失の残存である(拙稿「古
今集延喜五年奏覧考(下)」、『国語と国文学』一九七三
年二月)。

(9) その一端は、拙稿「古今集所収亭子院歌合歌追入説」(『国
語と国文学』一九九〇年四月)に説いた。

(10) 工藤博子氏「古今集五番歌の『春かけて』の解釈―万
葉集と三代集の用法に及ぶ―」(『香椎潟』第三八号、
一九九三年三月)・岩佐美代子氏「春かけて」考―中
世同種表現詠の解釈に及ぶ―」(『和歌文学研究』第
八四号、二〇〇二年六月)。

(11) 「えにこそありけれ」は、「江に」「枝に」などに「縁
を掛ける慣用句であった。拙稿「夕顔の宿りからの返歌」
『国語国文』一九九八年五月)参照。

(12) 五月五日ゆえ、あなたを心に掛け、ひたすら泣くばか
りの意で、「ねにのみ泣く」で出る声は泣き声のみで

ある。工藤氏が「あなたのことを口に出して(言つて)
は泣いてばかりいる」と述べた意味にはならない。

(13) 「春」「晴る」の掛詞を見逃されている歌がある。
見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日
やながめくらすむ (恋一・四七六、業平)

知る知らぬなにかあやなくわきていはむ思ひのみ
こそしるべなりけれ (同・四七七、よみ人しらず)
起きもせず寝もせて夜をあかしてははるのものと
てながめくらしつ (恋三・六一六、業平)

三首目は、本来最初の贈答歌への再返歌で、「晴るの
もの」を掛けていよう。長雨になりそうなので眺め暮
らすであろうと贈ったのに対し、「思ひ」の「日」がな
い人はあてにならぬと応ずる。再返歌は、春の風物を
一晩中「晴るのもの」とながめくらしして、「日」が出る
ようにしたと答えている。

(14) 稲賀敬二氏は、中務は「梅が枝」の歌に「想を借りた
のであろう」と指摘しているが(『中務』一二七面)、「日」
「晴る」についての言及はない。

(たなか・きみはる／元名古屋大学教授)